

私学の魂

麻布中学校・高等学校

**中高時代には失敗してもかまわない。
その経験が「自由」、「自律」の意識を深化
させるからだ。「青年即未来」の理念のもと、
人間としての大いなる成長に期待する!**

港区元麻布という都心の一等地に、都内の私立中高一貫校のなかでは広い校地を有する麻布中学校・高等学校。最寄りの東京メトロ日比谷線「広尾駅」から徒歩10分のほか、都営地下鉄大江戸線「麻布十番駅」、東京メトロ南北線「麻布十番駅」、東京メトロ千代田線「乃木坂駅」などからも徒歩12～20分で通える。

その通学至便な立地、「自由闊達」という言葉に象徴される校風、中学入試問題にも反映されているアカデミックな伝統に憧れ、毎年多くの受験生が同校を目指す。中高時代に失敗する経験からも「自由とは何か?」を考え、やがて自分を律する力を育てていく。今回はご自身も卒業生である校長の平秀明先生に麻布中学校・高等学校の教育についてお話を伺った。



校長の平秀明先生

DATA 1

麻布中学校・高等学校

沿革	1895 (明治 28) 年	麻布尋常中学校創立。校長・江原素六。東洋英和学校内に校舎。
	1899 (明治 32) 年	麻布中学校と改称。
	1900 (明治 33) 年	現在地に新校舎完成。移転。
	1922 (大正 11) 年	江原素六死去 (80 歳)。清水由松・第 2 代校長に就任。
	1947 (昭和 22) 年	新制中学校に改組。第 1 回文化祭。
	1948 (昭和 23) 年	新制高等学校に改組。中高 6 年一貫教育始まる。
	1969 (昭和 44) 年	第 1 次学園紛争。
	1970 (昭和 45) 年	山内一郎 校長代行に就任。第 2 次学園紛争。
	1995 (平成 7) 年	創立 100 周年記念館落成。100 周年記念式典。
	2000 (平成 12) 年	1 学級の定員減を実施 (全学年で 6 学級を 7 学級に)。
	2013 (平成 25) 年	平秀明 第 10 代校長に就任。
	2015 (平成 27) 年	創立 120 周年記念体育館落成。120 周年記念式典。

校長 平秀明

所在地 〒106-0046 東京都港区元麻布 2-3-29
TEL : 03-3446-6541 (代表)
<https://www.azabu-jh.ed.jp/>

交通 東京メトロ日比谷線「広尾駅」徒歩 10 分、都営地下鉄大江戸線「麻布十番駅」徒歩 12 分、東京メトロ南北線「麻布十番駅」徒歩 15 分、東京メトロ千代田線「乃木坂駅」徒歩 20 分。

中高時代の失敗の経験から 「自由とは何か？」を考え 自分を律する力を育む

校長の平秀明先生が、麻布中学校を受験して入学したのは1973（昭和48）年だったといいます。

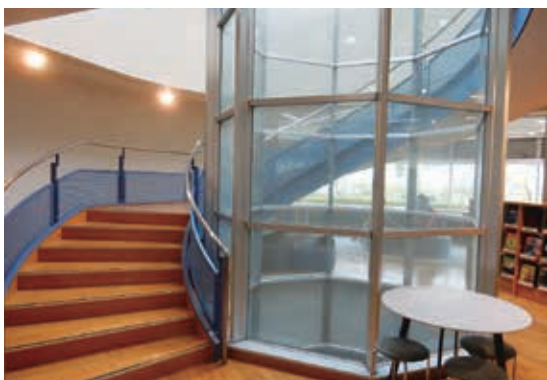
「私が入学する3～4年前に学園紛争があり、中学1～2年の頃は、まだ学校が荒れていました。しかし、間もなくして、中学3年～高校1年の頃には学校も次第に落ち着いてきました」と平先生は当時を振り返ります。

「在校時は化学部の部長を2年務め、将来は研究者になりたいと思い、高校卒業後、東京大学工学部で応用化学を専攻しました。そこで専門分野の勉強をしたり、夜遅くまで実験をしたりして、大学院進学も内定していたのですが、物を相手にするよりも人間に接する仕事がしたいと思うようになり、教員になろうと教育学部に学士入学しました。そこで2年間修学して教員免許を取得しました。当初は都立高校の理科教員志望だったのですが、そんな時期に母校で数学教員の募集があり、高校時代の担任から『受けてみては』との後押しもあって面接に臨み、採用となりました。それ以来、母校の教員を勤めてきました」と平先生。

麻布着任後間もない頃、先輩教員に言われたのは、「授業は任せるし、自分のペースでやれば良いけれど、職員会議はきちんと出席するように」ということだったそうです。

「隔週水曜日の放課後に職員会議があるのですが、最初は衝撃を受けました。麻布の教員は、こんなに生徒と教育のことを真面目に話し合っているのだなと…。自分が生徒のときには分かりませんでした。互いの教育観をぶつけ合い、徹底的に話し合っていました。

会議は15時過ぎから始まるのですが、19時過ぎま



創立100周年記念館内の図書館。麻布の「知のセンター」になっている。

で続くこともしばしばでした。会議後も学校の近くで夕食を食べながら、また議論が続いたり…。

そんなときに、麻布は単なる進学校ではなくて、生徒をいかに育てるかということを真剣に考えている学校なのだ初めて認識しました」と平先生は述懐します。

世間ではよく「麻布の自由」と言いますが、生徒だけではなく、先生方にも自由な雰囲気がある一方で、舞台裏では、それほど生徒のことを真剣に熱く議論していたとは、少し意外にも思えます。

「生徒手帳や校則がきちんとあって、制服や髪型、日頃の行いなど、『本校の生徒はこうしなさい』という姿勢の学校もありますが、麻布では『何々をしてはいけない』という校則は、別の意味で生徒を拘束するものではないかと考えています。そして、そういう校則があると、教員も拘束されます。生徒が校則に違反したら取り締まったり、指導しなければいけなくなります。

校則を離れて、子どもたちがやがて大学や社会に出たときに、外からの規制が無いなかで、きちんとやっていけるかどうかということが勝負だと思っています。その点、本校には明文化された校則はなく、もちろん法律や社会規範に反するようなことがあれば指導しますが、自分で考えて行動して、責任も最後は自分でとるという経験をさせます。始めのうち、中学低学年のときには、大きく間違ったり、みんなに迷惑をかけたりするなかで自由についての理解が深まっていくのです。自分の自由は他人の自由を侵害することにもなるわけですから…」と平先生。

自由というのは危険な道具でもあり、そのハンドリングに慣れていく経験をするための6年間だと麻布では考えられているようです。

「校則がないということは、逸脱行為をした生徒に対して、学校や教員集団がどう指導するかということも問われます。生徒の日頃の態度や、家庭や友達関係、そういうものを見ながら、一人ひとり判断していく必要があるということになります。ですから教員も、一人ひとりの生徒に対して日頃から理解を深めて接していかなければなりません。

最終的には、子どもたちが自分のなかに、自分を律



生徒の研究作品・論文集成『論集』を前に語る平校長先生。

する基準をつくることを目標にしています。将来大学や社会に出て、自分のなかに自分を律する基準があれば大丈夫だと思います。中学・高校時代は、長い人生の中ではまだ発展途上なので、失敗してもいいのです。

社会に出てから大失敗しないように、中学・高校でいろいろ失敗して、そこで指導を受けたり、気づきがあるなかで、反省したり、友達との関係をもう一度築き直したりして、やっていければいいと思います。

そういう意味では本校の教員は、一方で校則に絡めとられることなく、他方で自由というものを野放図ではないものにしていく姿勢を示さないといけないので、そのバランスが大変なのです。

ですから、生徒指導部という部署は本校にはありません。1学年が7クラスあり、各クラスには正副担任がいて、14名で『学年会』を構成しています。何かあると、その学年会の教員が集まって、生徒をどのように指導していくかという話し合いを毎週のようにやっています」

それでは、入学してきた生徒に「中高の間は失敗してもいいんだよ」ということを、どうやって伝えているのでしょうか？

「男の子が1,800人もひしめいている学校なので、日々喧嘩があったり、いろいろあります。ただ、何か逸脱行為があったときには、進学校ではあっても、人間として守らなければいけないことの方が大事だという意識を全教員が共有していますので、授業より優先して根気よく指導に当たります。生徒と教員と1対1で話し合ったり、担任だけではなく学年会の教員が代わる代わる話したりもします。

そういう経験のなかで反省して、立ち直った生徒は、私から見ると、もう大丈夫ですね。もちろん、ほとんどの生徒は、そうした問題を起こすこともなく、無事に卒業していくわけですけど…」

「学年会」と「教科会」 二つの大きな車輪で進められる、 麻布の教育

それでは、各教科の特性や各教員の専門性を含めて、授業をどのように行うかは、先生の間でどう伝達・共有されているのでしょうか。

「本校は高校での生徒募集を行っていないので、6年間という長いスパンで各教科のカリキュラムを組み立てています。授業のペースや、どの単元をどの学年で行うかということは、各教科に任されています。教科会といって、たとえば数学科なら毎週火曜日の4時間目に『教科会』という時間が時間割のなかに組み込まれています。その時間は本校では数学科の教員はみな

教科の部屋に集まって、カリキュラムの話や定期試験の内容、大学入試への対応などについての話し合いをしています」

どうやら、この「教科会」が、麻布の授業を形作る柱であり、ひとつの伝統になっているようです。

「たとえば数学科では、毎年1泊2日の合宿も行っています。1年間に生徒に課した定期試験の問題をコピーして持ち寄って、『これは少し難しいのでは？』とか、『それをやるのにどういう工夫をしたか？』といったことを教員間で共有しています。シラバスを公開はしていませんが、どの教科も毎年そうやって授業内容を練っています。そのようにして各教科のカリキュラムは筋が通ったものとなっているのです」

毎週この「教科会」を行うのは、毎日の授業や校務もあるなかで、なかなか大変なことではないかと思えます。

「なかなか大変ですね。各教科の会議だけではなく、図書、教務、入試、進路指導など、各教員がいろいろな校務分掌を担っていますので、それぞれの分掌でも会議があり、話題は尽きない感じです。

そういう意味で、麻布という学校は、生徒指導については、先ほどの14人の担任団による『学年会』で、もう一方の教科指導については『教科会』という、二つの車輪で進行しているのです。教員は必ず両方に属し、責任感をもって事に当たっていますので、校長はそれがうまくいっているかどうか見ているくらいの役割です(笑)」と、平先生は説明してくれました。

そういう『教科会』や『学年会』の場では、意見がぶつかったりすることもあるのでしょうか。

「そういうことも多々あります。今度また『学習指導要領』が変わりますから、教科を超えて話し合いが必要です。『教務部』という部署が担当で週2回会議をもちますが、それでも時間が足りないので、毎年夏に合宿を行い、校長も参加します。

時間割の大枠は決まっているので、授業時間を減らされる教科があると、議論が白熱します。それでも何とかみんなが納得する形で着地しないとけません」と平先生。



図書館での平校長先生。生徒に向けた目がとても優しい。

そうした「学習指導要領」について、私学にも守らないといけない枠があるものの、麻布では実際はかなり先生方の自由な裁量で授業が行われているように感じます。

「その点に関してはかなり自由だと思います。ただ、時間割の枠は逸脱してはいけませんので、以前の改訂で新設された『情報』などは、なかなか入れられなくて苦労しました。しばらくは高校2年で週1時間授業をして、学期末に集中授業を行ったりしました」

麻布なりに解釈して実現した 「総合的な学習の時間」とグローバル教育 =「教養総合」と「国際交流」

麻布では、いま教育界で盛んにいわれる、グローバル化やSTEAM教育などについては、どのように考えているのでしょうか。

「そういう声は基本的に雑音だと思っています…。とくに産業界の要請で、プログラミングやグローバル化など、先行する世代ができなかったことを何でもかんでも学校教育に押し付けるのは非常に迷惑なことです。ただ学校としては、そういう課題を“麻布なりに”解釈して実現するという方法をとっています。

以前の『学習指導要領』改訂のときに、『総合的な学習の時間』をどのように実現するかという問題で、すいぶん議論になりました。何度も関係部署で合宿して話し合い、最終的に職員会議では次のことを決めました。

『2004年度から中3・高1・高2の学年の枠を取り払い、『特別授業』として、学期ごとにテーマに沿った少人数授業を中心とした選択必修の授業を土曜日に2時間設定する』ということです。

実施後3年を経過して見直しを行い2007年度からは開講学年を高1と高2に絞り、『教養総合』と名前を変えて、人文、科学、語学、芸術、スポーツの5



創立120周年記念体育館。地下1階から4階までのフロアに運動施設が配置されている。

分野で、教員と外部講師による、テーマに沿った少人数授業を行っています。

そのほかにも『リレー講座』という形式で、協力してくれる卒業生など外部の講師を呼んで、計8回、あるテーマのもとに、いろいろな角度から授業をしてもらうという講座を開いています。『現代医療を考える』、『アフリカ学』、『ロボコン』などもあります。

この『教養総合』は生徒にはとても満足度の高い授業になっていて、特に外部の講師やOBが来てくれると、一種のキャリアガイダンスのような形にもなっています。いま世の中では『総合的な学習の時間』を減らしていく方向にありますが、本校では、すいぶん考えて導入したことでありますし、土曜日に2時間の枠を取るのは大変なのですが、次回の『学習指導要領』改訂後も続けていくつもりです」と平先生。

麻布の教員が熟考して辿り着いた形に、いまも確たる手応えを持っているということなのでしょう。

「また、グローバル教育については、1995年の学園創立100周年のときに国際交流を始めましたが、20年以上の活動を経て、非常に充実したものとなっています。カナダ、中国、韓国の学校と行き来しています。いま文科省や教育界ではSGH（スーパーグローバルハイスクール）やグローバル教育に力を入れていますが、本校でははるか以前から取り組んできました」

好奇心が盛んな麻布の生徒さんは、そういう先端的な授業や試みに食いつきが良いのではと想像できます。

「最近読んだ書籍に、『教養＝知識×考える力』と書かれていて、なるほどと思ったのですが、いまの時代は知識だけ持ってもダメということなのでしょう。昔は知識をたくさん持っている人が教養人でしたが、いま知識やデータはネットにアクセスすれば、すぐ手に入りますから、体験もなく知識だけため込んでもダメなのです。さらにその知識をもとに自分の考えをどう生かしていくかが大事であって、それが足し算ではなく掛け算であることに意味があると思っています。そして、先の書籍には『知識が3割、考える力が7割』とあったのですが、まさにそうではないかと思えます。

以前から本校の中学入試問題は記述式中心で、国語、社会のみならず、算数や理科でもかなり書かせていますが、これは単に答えが合っているかどうかだけではなく、その場で自分で考えて、その考えを自分の言葉で表現するという点を重視しているからです。その姿勢はどの教科にも共通するものです。つまり『入試問題で書かせる』ということは、『学校に入学してから書かせる』ということです。

1970年代半ば以降、中学入試の社会では、たくさん記憶して、それを正確に答えるような問題から、あ

るテーマを軸に地理や歴史、政治や経済を総合的に考えさせる出題形式になりました」

『教養総合』の授業をはじめ、部活や友人関係を通してシャワーのような刺激を受ける！

「中学3年生と高校1年生には、3学期に次年度開講する『教養総合』の各講座のシラバスを示したガイドブックを渡して希望を出させるのですが、人気のあるものは抽選になることもあります」

『教養総合』の授業では、生徒からテーマの希望が出ることもあるのでしょうか。

「そういうリクエストもあります。私も校長になる前は、『科学者・技術者の世界』という講座で、理化学研究所の方など、いろいろな分野の専門家をお呼びしたのですが、そのときに、生徒のリクエストでゲームのクリエイターの方をお招きしたことがありました」

かつて「学校5日制」が導入されたときには、「部活動の時間が制限されるので反対」という意見を麻布が真っ先に表明しました。

「本校には運動部が25、文化部が20あり、多くの生徒が活発に活動しています。入部していない子もいれば、二つも三つも入っている子もいます。

『学校5日制』が議論された当時の根岸校長は『土曜日は休みにしない』と決めたのです。『土曜日は子どもたちを地域に返す』という謳い文句があったのですが、麻布の場合には、生徒が広い範囲から通っているので、地域に返すというよりも、むしろ学校自体が地域になる必要があり、土曜日も学校に来て、クラブ活動などを精一杯やったら良いのではないかと考えたのです」

むしろ学校自体が自由な開かれた存在として、そこに来れば仲間も先生もいて、いろいろな体験ができる空間でありたいという考え方でしょうか。

「その通りです。中高の6年間、生徒にいかに刺激を与え続けられるかということが最も大事なことであると考えています。深い知識と教養を備えた教員の魅力もありますし、教科で新しいことを学べば視野が広がり、友達や先輩・後輩など、みんないろいろな個性や能力にあふれています。

生徒は英語や数学といった勉強に関してだけでなく、読書の量、スポーツでの活躍、女の子にモテるなど、多様な個性が集まっています。そのなかで、シャワーのように刺激を受けることが大事であると考えていたので、土曜を休みにするという選択肢は麻布にはありませんでした」と平先生は、当時の経緯を話して



体育館地下1階に位置する剣道場。柔道場も隣接している。道着や剣道具の乾燥室も完備。

くれました。

そういえば麻布は中学のサッカー部が東京都大会で優勝した年もありました。

「サッカーは人気が高く部員も多いので、中学と高校は別々に練習しています。2004年と2007年の2回、東京都の決勝戦まで勝ち上がり、2004年のときは優勝しました。必ずしも身体能力の高い生徒ばかりではなかったと思いますが、フォーメーションを研究したり、良く考えて練習したりしていました。また本校では文化系のクラブ活動も盛んで、囲碁、将棋、オセロなど、全国レベルで活躍しています」と平先生。

「考えて書く」力と、麻布流「Aモード」「Cモード」の切り替えができる力を育む！

「先ほどの『書かせる』という話では、ほかにも高校1年生で『社会科基礎課程修了論文』を1年間かけて書かせています。

社会科は中1から高1までは同じメニューで学び、



図書館の蔵書には、文壇やマスコミ関係にも多い卒業生の著作が！



校舎廊下の掲示板には、麻布らしい大人びた様々なビラやポスターが。

高2・高3では選択制になります。高1までの4年間で、自分が興味関心を持った社会的な問題について論文を書きます。そのなかで優れたものは、『考える葦』という冊子にして、その学年の生徒に還元しています。また、中学3年生の現代文では、やはり1年間かけて共同で卒業論文を書かせます。優秀なものは『論集』に掲載しています。

提出したらそれで終わりということではなく、こんな同級生や先輩の作品があるということ、"刺激として生徒に返す"ことが大事だと思っています。この『論集』も37年続いています。教員の論集委員会が、生徒の論文や芸術の作品のなかから"刺激返し"になる作品を選定しているのです

『論集』は麻布を志望する受験生や保護者が「麻布をよく知る」ためには、最適な材料ではないかと思えます。

「そう思います。学園説明会では図書館で手に取って見られますし、学外での説明会のブースでも見られるようにしています」

伊豆大島の三原山が噴火したときに大島に渡り、噴火の様子をレポートした生徒さんがいました。その行動には問題があったけれども、レポート自体はあえて『論集』に掲載したというエピソードがありました。

「ずいぶん前の話ですが、渡航が禁止になる直前に生徒が大島に渡ってしまい、迫真のレポートを書いたので、あえて『論集』に掲載したのです」

先の『書かせる』という面で、入試問題にも記述が多いと、採点も相当に大変だと思えますが、採点にあたっての先生方のスタンスとは、どのようなものになるのでしょうか？

「いまは入試当日に合格発表する学校も多く、翌日発表でも早いように思いますが、本校では、まる一日半をかけて採点しています。答えだけ合っている、算

数では途中が書いていないとバツということもよくあり、逆に途中まででも、正しい筋道であれば、ちゃんと評価しています。

だいたいこういう基準で採点しようということは事前に決めています。受験生のなかには、突拍子もない考えや議論の組み立てをする子がいたりするので、そういうときはその都度、ときには採点そっちのけで議論になったりすることもあります。これは正しいとか、やはりダメだとか、基準はあっても、イレギュラーな答案が出てくると、それをまた基準に取り込んで、採点済みの答案を見直したりすることもあります」

ところで麻布のOBが運営する「麻布流儀」というサイトがあり、そのなかの平先生のインタビュー記事に、「Aモード」と「Cモード」という話がありました。先ほどの三原山噴火のレポートの話ではありませんが、そうした問題のあった行動でも、その作品をあえて『論集』に掲載するなど、何か麻布的な共通点があるように思えます。

『麻布流儀』はどちらかというと卒業生向けのサイトです。麻布の生徒の流儀ということ言えば、学外で大声を出したり、近くのコンビニに裸で行って補導されたりするなど、問題を起こす生徒がいます。よくよく考えてみると、本校はつねに校門が開かれていて、休み時間に外に買い物に行ってもお咎めなしなので、コンビニも学校の延長だと思っている生徒もいたのではないかと…(笑)。

ですので、校長としては『Aモード』と『Cモード』、もうひとつ『Fモード』と、状況に応じてモードを切り替えなさいという話でした。『Aモード』は『麻布モード』で『アットホームモード』でもあるから、多少の逸脱は大目に見るけれど、校門から一步外に出たら、そこは世間だから、学校とは違うので、常識の世界の『C(=コモンセンス)モード』に切り替えろと…。さらに、入学式や卒業式、始業式や終業式などは、普段とは違うフォーマルな『Fモード』に切り替えろということですよ」と、平先生。

「そのような話をしたら、少しは効果があったようです」と笑顔で教えてくれました。

その切り替えがきちんとできるのが、本当の麻布の生徒であると考えます。そして、そこに「麻布の自由」があると感じます。

「学園紛争前は制服着用で、遅刻も厳しく指導されました。ましてや休憩時間に外に行くなど許されませんでした。それでも当時から、教員は自由に、知識を教え込むというよりは、『数学はこんなに面白いぞ!』と、学問の面白さを伝えるような授業をしていました。そういうところは今でも変わっていないと思います」

戦前の旧制・麻布中学校のOBが いまでも入試問題の記憶を語り合う、 伝統・校風・授業・進路

「校長なので、いろいろな卒業生の同期会に招かれるのですが、先日、今までで最高齢の同期会がありました。昭和18年旧制・麻布中学校卒業の同期会で、94歳のOBが銀座に8人集まりました。皆さんお元気で、『中学入試の算数ではこんな問題が出ていた』などという話もありました」と、OBのエピソードを披露してくれた平先生。

今でも当時の中学入試問題を覚えているのはすごいことです。それだけ印象的だったのでしょうか。

「進路の話題でも、当時のエリート校である海軍兵学校に入学したのに、戦争に負けてしまったので、また大学に入り直したとか…。当時は5年間、13歳から17歳まで一緒だった仲間が、卒業後80年近く経ってもこのように集まってくるというのは、すごいことだと思いました」

そういえば、「戦後、東大の合格者数ランキングで一度もベスト10から外れたことがなく、逆に一度も1位になったことがない」というのが麻布の誇りだと言ったことがあります。本当なのでしょうか。

「東大至上主義になってしまうと、違う学校になってしまうと思うんですね。かといって、それなりの進学実績を伴わなければ、単なる野放図なだけの学校になって、自由な学校だと誇れなくなってしまうので、そのバランスが大事です。もちろん、進学したい生徒には、それだけの学力をつけようと教員は一生懸命ですが、ほかにも刺激が多いので、取り組みが遅くなってしまふ生徒もいるようです」

定期試験以外の評価というのは、どうしているのでしょうか？

「学年会や、教科担当の教員の裁量で、平常点のほか、レポートや小テストを取り入れたり、追試や補習をしたりしています」

これまで、麻布は授業の取材は受けていなかったと思いますが、それは授業に集中することを重視したいという考え方なのでしょうか。

「その通りです。授業は神聖なものと考えていますので、校長といえども、勝手に教室に入ったりはしません。保護者からも授業を参観させてほしいという声がありますが、そこは生徒と教員の真剣勝負の場なので、ご遠慮いただいています。テレビ局などからも取材したいという声があるのですが、そこはごめんなさいという感じです」



図書館では在校生が思い思いに過ごせる。なかには睡眠をとる生徒も。

聞くとところによると、麻布では、必ずしも静かな授業ばかりが行われているわけではないようです。

「なかには寝ている生徒もいれば、高校になると内職している生徒もいます。勝手にチャチャを入れたり、質問したりしてくる生徒もいます」

そうして先生にチャチャを入れている生徒が、授業を活性化している面もありそうです。

「そうですね。ですから、必ずしも静かな授業が良い授業ではないと思います」

ほかに、芸術系の教科や音楽会など、そういう芸術・文化面の充実が、男子校のなかでも麻布の特徴なのではないかと思います。どんな風に大事にしているのでしょうか？

「芸術はとても大事です。中高を通じて文科省の配当時間よりも多く充てています。高校1年、2年で書道、音楽、美術、工芸からひとつ選択必修で履修するのですが、高1で週2時間、高2で週1時間です。文科省は以前の改訂で高校で2単位履修すれば良いことにしたため、本校ではそれまで各学年2時間計4単位設けていたのを、泣く泣く3単位にした経緯があります。それでも文科省の定めるところより5割多いのです」

シンボルである校舎の周囲には 図書館棟や新体育館など、 新たな歴史をつくる設備も！

麻布のシンボリックな中庭を囲む校舎は、変わらない佇まいですね。

「中庭を囲む本校舎は、80年以上前に建てられた建物ですが、血気盛んな若者を80年以上も受け止めてきた校舎でもあるので、壁も厚く、非常に頑丈にできています。窓も広いし、天井も高いので、古いということでの不便さはあまり感じません。最近は各教室に

プロジェクターや高性能のスピーカーなども入れたので、英語や理科、社会などでは、若手教員が授業を創意工夫して活用しています」

図書館は麻布にとって、どのような存在なのでしょう。

「現在の図書館は築後、24年経ちますが、麻布の『知のセンター』として機能しています。7万冊以上の蔵書がありますが、そのようなハード面だけではなく、図書館を運営するソフト面にも特筆すべき点があります。

各教科から1名の教員が図書委員となり、司書教諭との間で『図書館部会』という会議を毎週開いています。専任の司書教諭が二人と、事務のアルバイトの方が二人いますので、生徒の多様なリクエストに対応しています。図書館は9時から17時半まで利用できます。土曜は13時までです」と言う平先生は、このインタビューの後に図書館と新たに出来た素晴らしい体育館を案内してくれました。

平先生が校長として、この先の麻布を担う先生方に伝えていきたいのは、どのようなことでしょうか？

「若い世代が増えてきましたので、やはり麻布の良いDNAを、これからも伝えていってほしいと思います。そして、学校ですから、授業で勝負というか、充実した、特色ある授業を大事にしてほしいです。それで生徒を惹きつけることが、学校の役目だと思いますので…」

麻布の先生に求める資質というのは、どんなことでしょうか。

「中学は義務教育ですから、普通にしていれば公立の学校にタダで行けるのに、親はお金を払ってでも行かせたいと考えて私立に通わせているのですから、良い教育をすることが大切です。私立学校の教員は、そういう保護者や入学してくる生徒の気持ちを受け止めて、授業やクラブ活動など学校生活すべてにわたって良い教育をしてほしい、ということ伝えたいです」

何度もお話のなかにあったように、常に刺激のある空間にしていきたいということでしょうか。

「はい、そうです。授業で象徴的なのが、中1の社会です。本校独自の『世界』という科目で、世界地理と現代史をミックスした授業をします。イスラム問題など宗教の問題や民族の問題などを、1年間でざっくりととらえたうえで、中2以降の日本史や世界史、地理、公民や政治経済に入っていくというやり方をとっています」

それがいろいろな面で、生徒のモチベーションにつながってくることだと思います。いろいろな刺激を受けて、自分の興味や関心が広がってくると、それを自由にやらせてあげるといえることでしょうか

「それが、ある種の教育の目的だと思います。自分でその教科が面白いと思ったら、親や教師がいくら止めたとしても、なかには大学のレベルまで自分で勉強し



図書館2階入口ギャラリーには、創立者・江原素六の揮毫による「衣錦尚褻（いぎんしょうけい）」の言葉が…。

ていくこともあります。自分の興味ある範囲を深掘りしていければ、それは良いことだと思います。一つでもそうしたことに目覚めると、多方面に波及していきます。学校の役割は教科内容を教えるということではなくて、生徒に勉強の仕方を教え、自己展開できる子を育てることだと思います」

最終的に、そういう自己展開できる子を育てることが教育目標ということですね。

「中国との交流で河南省の高校に行き、たいへん刺激を受けた生徒がいました。自分で中国語を勉強してマスターし、学校間の交流ではなく、一人でその学校に行き授業を受けるなどして、その後、台湾大学に進学しました。また、シカゴ大学に進学した生徒がいましたが、彼も『哲学オリンピック』に出場し、英語でエッセイを書くなどしていました。入賞はしませんでした。海外で勝負したいという気概のある生徒でした。

ゲームの世界で、東大卒プログラマーとして、対戦型格闘ゲームの世界チャンピオンになったり、大学へ行かずに奨励会から将棋のプロ棋士になった生徒もいました。勉強だけではなくて、興味のあることに突き進んで行ってしまうところが麻布的なのかもしれません」

何かを極めていくというか、社会に出ても独自の世界観を持っていて枠にはまらないというか、そういう生徒がたくさんいるのですね。麻布では、必ずしもバランスが取れていなくても、成績が良くなくても、何か一つ得意なことがあると、友達や先生方に認めてもらえて、リスペクトされる雰囲気があると聞いたことがあります。

「男子校なので女子の視線を気にすることなく、たとえ『オタク』と言われてしまいそうな趣味でも、麻布では周囲にも同じような子がたくさんいて、それぞれの居場所があって、楽しいのではないかと思います」

平先生、今日は長時間ありがとうございました。